

『紅葉が映える季節に寄せて』



巻頭言

東京都健康長寿医療センター研究所
東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター研究員
国際リハビリテーション研究会 事務局 有田 久仁子

【巻頭言】
『紅葉が映える季節に寄せて』
有田 久仁子

【特集】
『制度と現場をつなぐ視点
—理学療法士から国際協力、そして行政へ—』

徳田 壤二

『協力隊OBのキャリア』

伊藤 智典

【連載：研究万華鏡】
『WHO Disability Health
Equity Network：政策動向と
研究課題の設定』

山口 佳小里

【コラム：世界のめがね】
『広場に広がる、もう一つのつながり』

大西 海斗

熱波が猛威を振るった夏が、ようやくひと段落し、紅葉が映える季節となりました。何気なく落ちている一枚の葉がとても個性的でかわいらしかったり、遠くの森全体を眺めると、一枚一枚の木の葉が織りなす壮大なグラデーションは、その瞬間も、そして移ろう姿も、本当に美しいものです。

さて、皆さんは一本の木を見ているでしょうか。それとも、森を見ているでしょうか。私は臨床OTから公衆衛生へと活動の場を移したとき、大きな違和感を覚えました。個々の木に寄り添う視点から離れ、全体を俯瞰するレンズに切り替えた途端、目の前の対象者が見えなくなってしまったように感じたのです。まるで自分の仕事が誰かに届いているのか、実感を持てなくなったようでした。

けれども、地域の課題に焦点をあてる中で、一人ひとりのケースがその課題を照らし出してくれることに気づきました。また、地域全体の変化も、一人の成功例や失敗例があってこそ生まれるものだ実感しています。目の前の一枚の葉や一本の木に寄り添う臨床家も、森全体の健やかさを見守る公衆衛生も、自分の仕事の先に、いつも誰かの笑顔を思い描いていることが共通していると感じています。

国際リハ研究会では、その両方の視点に触れることができと思っています。皆様も、そのピントをいつも行き来させながら、変わりゆく景色を楽しんでいただければと思います。

【特集】

協力隊OBのキャリアパス(第2回/全2回)



【徳田 壤二さん】



【伊藤 智典さん】

本号の特集では、2025年4月発行のvol.27に引き続き「協力隊OBのキャリアパス」というタイトルで任期を終え帰国した元JICA海外協力隊のキャリアについて取り上げました。協会・行政、現場とのつながりをそれぞれの視点からご執筆いただきました！

制度と現場をつなぐ視点 —理学療法士から国際協力、そして行政へ—

徳田 壤二（福岡県バンコク事務所）

◆ 医療現場での気づきと国際協力への一歩

福岡県バンコク事務所で勤務しています徳田壤二と申します。私はもともと理学療法士として10年間病院に勤務した後、青年海外協力隊としてタイで活動し、現在は福岡県職員として、福祉や国際交流の分野を経て、海外事務所にて福岡県と海外との幅広い交流推進業務を担当しています。

学生時代から国際協力に関心があり、「将来は自分の専門性を活かして海外で活動したい」という思いを持ち続けていました。まずは国内での臨床経験を重視し、卒業後は理学療法士として病院で働き始めました。

病院では主に小児や呼吸器・がん領域の患者さんを担当し、10年間にわたり現場でリハビリテーションに取り組みました。身体機能が回復しても、実際の暮らしに戻るためには医療だけでは解決できない課題が多く存在することに気づかされました。住環境、雇用、福祉制度、家族の支援——そうした社会的な条件が、患者さんの回復や生活の質に大きな影響を与えていることを実感するようになり、私の関心は次第に「医療と社会の接点」へと広がっていきました。

そして30代になり、かねてからの夢だった国際協力の道を実現すべく、青年海外協力隊に応募し、タイ東北部コンケン県の労災リハビリテーションセンターに2年間派遣されました。現地では、患者へのリハビリ支援に加え、タイ人療法士への技術移転や人材育成にも力を注ぎました。限られた医療資源や異なる制度の中で支援を行うなか、制度の仕組みひとつで生活の質や支援の届け方が大きく変わることを実感しました。そこで「制度の視点から現場を支えたい」という思いが芽生え、公務員の道を志すようになったのです。

◆ 制度を動かす立場へ——公務員として学んだこと

福岡県庁では、障がい福祉、政策企画、国際交流などの部門で勤務し、現場経験を活かして行政の企画や運営に取り組みできました。特に障がい福祉分野では、支援を受ける当事者や現場の職員の声に耳を傾けながら、「現実に即した支援とは何か」を常に考え続けてきました。

現場で得た課題を施策に反映する中で、制度と現実のずれや支援の届きにくさに自然と目が向くようになりました。制度や仕組みが現場でどう生きるかを意識し、関係者と協力しながら実行を支えてきました。

また、国際交流分野では、青少年をはじめとする幅広い交流事業を担当し、人と人とのつながりを生み出す機会にも関わりました。国際的な交流を通じて育まれる相互理解や信頼関係は、分野を越えて暮らしを支える基盤となることを強く感じています。



理学療法士

公務員（行政）

- ・リハビリテーション病院（4年間）
小児領域を担当
- ・大学病院（6年間）
特に呼吸器を中心とした
内部障がい・がん領域を担当



- ・障がい福祉課（3年間）
- ・総合政策課（1年間）
- ・国際交流課（1年間）



病院

JICA海外協力隊

転職

福岡県庁

福岡県
バンコク事務所

- ・派遣国：タイ（コンケン県）
- ・職種：理学療法士
- ・期間：2年間
- ・配属先：東北部労災リハビリテーションセンター
- ・活動：患者治療、同僚への技術移転、タイの全国理学療法学会でのポスター発表

- ・中小企業支援
- ・県産品PR
- ・観光PR
- ・バンコク都との交流事業

【徳田さんのキャリアパス】



◆ 再びタイへ——人と地域を結ぶ役割

現在は福岡県バンコク事務所に駐在し、経済・観光・文化など多様な分野を通じて、福岡県とタイ、さらにASEAN諸国やインドとの交流を推進しています。協力隊時代に培ったネットワークや語学力を再び活かし、大好きなタイと福岡県を結ぶ仕事に携われることに、大きな喜びとやりがいを感じています。

理学療法士、国際協力、行政。異なる道を歩んできましたが、「人の暮らしを支える」という軸は一貫しています。今後も制度と現場、日本と海外をつなぎながら、人々の暮らしに寄り添う実践を続けていきたいと考えています。



協力隊OVのキャリア

伊藤 智典（公益社団法人 日本理学療法士協会）

学生時代、エチオピアでおきた飢饉で飢餓に苦しむ子供たちの現状を知りました。将来の一つの道として遺伝子研究に進むことを考えていましたが、同じ時期に祖父が脳卒中を発症しました。医療、リハビリテーションのリソースがない過疎地域における困難な状況を目のあたりにし、悩んだ結果、私は理学療法士になる道を選びました。人はどこに生まれたとしても、等しく幸せに生きられる社会、世界になれば良いのという思いがありました。

愛媛県の一般総合病院で急性期から地域まで幅広い臨床を経験したのち、2004年から海外協力隊に参加しました。派遣先はたまたまエチオピアで、理学療法士の大学での養成とともに、CBRにも携わりました。協力隊での活動後、平和構築と公衆衛生のどちらの修士課程へ進学するかで悩みました。人々の幸せな社会の実現のためには、平和構築は必須ですが、自身のバックグラウンドが違いすぎ、またキャリアの方向性が一気に変わってしまいます。そんな折、英国のWales大学Swansea校に、公衆衛生・健康増進学の修士課程が開設されたことを知った私は、「医療リソースの少ない地域においても、都市部や先進国においても、学んだことが活かせるのではないかと考え、同課程への進学を決めました。

修士課程が終わる2010年頃、日本理学療法士協会の事務局で職員を募集していることが分かりました。修士課程後のキャリアを考えて英国から応募したところ、合格結果が届きました。入職できたのは、たまたま英語が出来る人材を求めているタイミングだったことも理由ではないかと思っています。

入職1年目は、公益事業、広報、調査、国際などの事務業務を経験しました。2年目、東日本大震災が発生しました。日本作業療法士協会、言語聴覚士協会の役員やボランティア会員らと共に、大型のバンをレンタルし、東北自動車道を北上しました。足掛け6か月にわたり宮城県の関係者の皆様に指導、激励をいただき、またボランティアの先生方にご支援をいただきながら、仙台、石巻、南三陸、気仙沼まで後方支援を行いました。日本災害リハビリテーション支援協会(JRAT)の始まりにあたる取り組みでした。

その後、学術事業や教育のみならず、秘書業務や総務業務など一般的な理学療法士では得られない経験をしてきました。特に総務課での勤務においては、大規模な調達・契約、関連法令などを学ぶことが出来たのは私の中で大きな糧となっています。その後、組織変更のため事務局内に新設された国際事業課へ異動となりました。

2023年の日本理学療法士協会の定時総会で理事への就任が承認されて以来、職員兼任理事を務めています。また同年、国際組織World Physiotherapyのアジア西太平洋地区の執行委員に選任されました。公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会様の国際委員にも就任させていただきました。日本理学療法士協会入職してから今まで、ずっと障害分野NGO連絡会(JANNET)の事業を担当させていただいています。JICA海外協力隊のリハビリテーションの技術顧問をされていた、故) 田口順子先生が設立にかかわった組織です。今までの道筋を作ってくださったのは、それぞれのタイミングにおいて、私に何かしら影響を与えてくださった、多くの人々なのだろうと感じています。

これからも出会いを大切に、人が人として幸せに生きていける社会づくりに貢献したいと思います。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

現在

国内

一般総合病院
術後急性期~地域介入など
(愛媛県)

理学療法士養成校
(高知県)

クリニック勤務
& 留学準備
(東京都)

国外

JICA海外協力隊
(エチオピア、ゴンダール大学)
マザーテレサの家
(エチオピア、インド)

大学院留学
MSc Public health and health
promotion (イギリス)

公益社団法人
日本理学療法士協

事務局 国際事業課

⇒グローバルヘルスに資する事業、
調査情報収集、etc
パブリックヘルスに資する事業

兼任

日本理学療法士協会 理事

⇒組織運営の管理、意見

障害分野NGOネットワーク 監事

⇒組織運営の監理監督

日本障害者リハビリテーション協会

国際委員会

⇒国際事業への助言、Rehabilitation

Internationalへの提言

World Physiotherapy アジア西太平洋

地区執行委員

⇒地区内のヘルスイシュー

【伊藤さんのキャリアパス】

【連載】研究万華鏡*

Inspiration for your research

**WHO Disability Health Equity
Network : 政策動向と研究課題の設定**

大変喜ばしいことに、本研究会がWHO Disability Health Equity Networkの構成メンバーに選ばれました。このNetworkは、障害による健康格差の解消と、障害のある人々の健康の公平性確保を目的とするWHO Disability Health Equity Initiative (2025年6月設立) 1)と連動して発足したものです。その背景には、2023年の国連UHC※ハイレベル会合で採択された新たな政治宣言があります2)。宣言は、障害者を含むすべての人が質の高い医療・保健サービスに公平にアクセスできる包摂的体制の重要性を明記し、「誰一人取り残さない (Leave No One Behind)」の理念を再確認しています▼研究者として、こうした国際動向や政策的潮流を理解することは、研究を社会的に意義あるものへ高める上で不可欠です。国際的視点を踏まえた研究は、研究助成申請時にも強いアピールとなります。実際、近年の科学研究費助成事業 (文科科研費) では「国際性」の評価が導入され、国際的な関連性を意識した研究立案の重要性が増しています▼筆者は国内外で疫学研究や医療・保健領域の制度・政策の研究を行っています。これまで特に「リハビリテーション」をキーワードとしてきましたが、当会がNetworkメンバーとなったことを契機に、今後は

「Disability」に焦点を当てた研究にも、より一層力を入れていければと考えています。

※UHC (Universal Health Coverage) : すべての人が、必要なときに、必要な質の医療や保健サービスを、経済的な困難なく受けられること

1)<https://www.who.int/initiatives/disability-health-equity-initiative>

2)<https://docs.un.org/en/A/RES/78/4>

(Harvard T.H. Chan School of Public Health (Takemi Program) 山口 佳小里)

【コラム】『世界のめがね』

世界中で活躍を展開している会員のめがねを通して
世界の姿を各号お届けします

『広場に広がる、もう一つのつながり』

▼モンゴルの中心、スフバートル広場で開かれたジャパンフェスティバルに足を運びました。
強い日差しのもと、私が関わる病院の救急チームが救護班として参加し、熱中症などに対応。主催者にとっても来場者にとっても安心につながる存在であり、同じ医療現場を支える仲間に関心と心強さを覚えました。

▼広場に並んだのは、日本食の屋台、企業ブース、そして勇壮な神輿。また、日本人歌手のステージで賑わい、浴衣やコスプレを楽しむモンゴルの若者たちの熱気にあふれ、会場は親日的な雰囲気満ちていました。

▼国際保健や国際協力の「現場」とは少し違う形で、人と人が自然につながる光景を見て、こうした小さな交流がまた新しいつながりを生んでいくのだと感じました。

▼とっても心穏やかな一日でした。

(大西 海斗)

【お知らせ】

【国際リハビリテーション研究会第9回学術大会】

テーマ：グローバルヘルスにおけるリハビリテーションの
挑戦

日程：2025年12月14日（日）9:30～16:00

会場：JICA地球ひろば（東京都新宿区市谷本村町10-5 JICA
市ヶ谷ビル）

参加費：会員2,000円 非会員3,000円 学生1,000円

学会HP ※一般演題登録、参加登録受付中です！HPをご確認
ください。

【The WHO Disability Health Equity Network】

当研究会がThe WHO Disability Health Equity Networkの
メンバーに承認されました。

今後も情報を発信して参ります。どうぞご期待ください！

編集後記

「国際活動の経験はその評価の是非を問わず、専門職として、また一個人として多様な価値観を育む貴重な機会となります。今回、JICA海外協力隊への参加が国際活動の登竜門として機能していることを改めて実感しました。私自身もJICA海外協力隊の経験者として、その原点に立ち返り今後の活動に生かしていきたいです。」(濱田 光佑)

「JOCVやJSIRの経験は、広い視野を持ち続ける力になっています。活動や学会を通じて出会う皆さまとの交流や学びが、日々の原動力です。これからも、一人ひとりのつながりを大切にしながら歩んでいきたいと思っています！」(三田村 徳)

事務局 編集担当

大西 海斗（開発コンサルタント）

長田 真弥（株式会社メディファール）

佐久間 善子（London School of Hygiene and Tropical
Medicine）

高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊、チリ派遣）

寺村 晃（大阪保健医療大学）

成田 徹平（東北大学病院）

濱田 光佑（愛知医療学院短期大学）

古川 雅一（株式会社 薬ゼミ情報教育センター）

三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

JSIR HP



【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>
【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局
jsir.office@int-rehabil.jp